

離島から見た日本

日本は島国である、離島もその点だけを見れば国と言えないことはない。私達が住む壱岐の島は海に囲まれた小さな国とも言える。自給できる恵まれた島ではあるが、国として自活出来るほどの要素はない。面積も対馬の五分の一も無く、その一町である巖原町と同じしかない。そんな小さな島に四つの町があり、各自治体を持っていた。こんな現実離れは、国の保護があるから出来た事である。

もし自立した島であれば、そんな無駄な事はしないだろうし、出来もしない。その矛盾を指摘した過去の先輩方は、一本化を唱えられた。そんな偉人が昔は何人もおられたが、皆島を離れ又は故人に成られてしまった。その当時は島民も国もその真意を汲み取れず、傍観してしまった。国も島が一つの自治体に成っても今までの物を保証するとも言わず、島民も一つになれば損をすると考えていた。もし当時の先駆者が言われる事を、国も住民も理解していれば「日本一幸せな島」に成っていたであろう。「遅くとも遅すぎる事ではない」今は無き先駆者に代わり述べさせて頂く。

先輩達の一本化事件から 20 年も過ぎた頃、国は合併を推進した。驚くことに今度はほとんどの人が賛成の声を発した。「長いものには巻かれよ」とか「合併の飴」か、一本化が実現した。それから 4 年が過ぎた、以前先輩達が唱えた一本化とはまったく違っている。まるで一本化の無免許操縦である。「国の心、地方は知らず」で地方分権の義務さえ検討せず、自立を考えず運営のみにさえ混同され、自立に必要な「経営」など考える者が居ない。それは住民が「経営」などしないのが行政と位置づけ、行政に頼るなど胸を張って言い、行政に無関心でもあったからとも言える。それでは一本化は四倍の力でなく、四倍のおろそかにも成りかねない。

我々庶民は未来の天下国家まで理解せよと言われても無理なことである。その日のこと自分の家族の事で、一生懸命である。しかしその中でも未来を想定し、我々に警鐘をならして導こうとする人が必ず居るのが人間社会である。その警鐘を聞くか聞かぬは、自由と言えども仕方がない。しかしそれを阻害し非難する権利は誰にもない。正当な場所で正当に議論するのが、民主国家のはずである。

離島の私達から見た国も、私達のそれとさして変わらないような気がする。このままでは日本の未来は、どうなるのだろうか。選ばれてその立場にある人は、それに相応しく聖人に近く有って欲しい。純粹にお天道様に真っ直ぐ向かえば、答えは簡単なのではなかろうか。それでも立場でいろんな解釈が出来る、それを正常な議論でまとめる。それが出来ないとすれば民主主義の末期症状としか思えない。そうすると、神様が成される独裁政治意外には正義が見えない気がする。

それが出来ない凡人は簡単な解決法がある。腐った物は破棄し新しい物を求めればよい、腐った物を新たに作るなど物理的には考えられないからである。やる気の有る者にさせ、駄目だったら辞めさせ新たに選ばせよ。やる気がなく、間違っただけをする者では真の発展は無いはずである。そんな簡単な事が通用しないのはどうしてなのか考える時ではなかろうか。

離島の凡人が言うべき事では無いかも知れない。しかし離島に幸せを求める凡人だからこそ、言える言葉でもある。国にも、真に国の未来を考えた人がいらっしやるのも見かける。そんな時、本当にテレビに向かい拍手をしたくなる。そんな方がいらっしやるかと思えば、ゼネコンと組んで税金を合法的に巻き上げようとの見え見えの人達も居ます。今問題の、道は必要ですがゼネコンが儲かる道とかは道の道違いのはずだ。本当の道は必要であるなら作るのが、道ではなかろうか。公共事業は事業でなく要る物だけを作るとすれば、未来はバラ色のはずである。

国の代表である立場の人で、日本の経済は最高に順調であると言う人が居る。そんな時こんな方々は、庶民をどのように考えているのだろうか腹が立つ。そして消費税は上げる必要がある、とまで言うのはこんなタイプの人が多い。リストラ不良債権整理と庶民を犠牲にする手法で、大手だけの黒字あわせ、「改革には痛みが伴う」と信じ込ませ庶民に届かぬままの改革では困る。最近国は格差問題を重視し、「これからの地方はこうするからこうしてくれと言わねばならない」との正論には感激する。この神の声とも思える言葉こそ地方改革の一步と思う。こんな指導者を持つ国民は最高に幸せのはずだ。しかし地方はピジョンを出さず、ただアメ玉だけを欲しがるのが解らない。今までと同じく地方に金だけ与えたらどうなるだろうか。

以前一億創生事業として、全国の町に一億円を自由に使えと与えられた。その経過を見れば、有効に使える自治体があるかないかは明確である。今の地方にはまったく改革が浸透していない、従って従来の考えと同じである。そのような中で正常な指導者が、選ばれるのは不可能に近い。改革もピジョンもない所に金を与えるほど、無駄なことはないかと心配する。そんなことをすれば、以前より日本は悪くなるのは明らかである。

しかしながら民主国家である多数決では、それを沮止することが出来ない。それを救うとすれば少数意見にも耳をかす、議論をするべきではなかろうか。親は子供達に生活費は平等に送る、しかし医学部とか何か為になることをする子には、将来を考えそれに見合ったお金を都合する。しかし子供みんなにそれを想定し、金を渡せばどうだろう。何も考えぬ子は無駄使いどころか、遊びほうけるかも知れない。

今地方を救おうと思うなら住民のやる気と危機感と未来を考える人達の声聞いてみるのはどうだろう。その声を聞く場所は「こうしたいからこうしてくれと言え」を遂行される国に置き、ある程度の組織団体であれば直訴を受け入れる検討をしてはどうだろうか。

それに対する予算は別予算で有れば、いかなる地方も腰をあげるだろう。なぜならば今の地方は金がないと言い、それを否決するからである。まして住民も先行投資を理解する人は少ないのが現実である。そのように与えた予算はほとんど運営で消え、自立経営には使われないうだろう。そのような環境が、地方の発展を阻害している一番の原因ではなかろうか。

国は地方分権とは言え、最高権威を持ち、その権限と義務が有ると思う。昔で言えば「直訴」も取り入れる気配りが必要と思える。案外「直訴」は真の声である場合が多い。

それも地方行政の意識改革が終われば、その直訴は不要となろう。ある意味では「直訴」は「行政との協働」とも言えないだろうか。

「協働」は「庶民が申し出る協働」が最高の形ではなかろうか。それを歓迎しない行政では、民主国家と言えるのだろうか。

しかし今の地方では、「赤信号みんなで渡れば恐くない」から脱皮できていない。それが正されるには、半世紀待っても来ないかも知れない。

その中でも少数ではあるが、懸命に危機感を訴える人達も存在する。

その中で特定非営利活用法 NPO の役割は、それを成すのに最適と思う。

これらは今の地方にも国の指導さえあれば、納得して使うであろう。
直訴などさせない、これらを正しく使いこなす地方行政で有って欲しい。

地方では行政に運営を越えて経営を求めるのは、意識上困難である。
そんな環境では、行政が民営化を考える事も思いつかない。
行政の出来ない分野を、住民側から申し出る NOP 法人は活用するべきだ。
地方行政の民営化と考えるなら、これほどの理想は無いのではなかろうか。
しかしそれを理解する行政も首長も、昔のしきたりを越えにくい。
従ってこの直訴を受け入れる、国策が必要ではなかろうか。
せめて地方をポンプに例えれば呼び水は必要である、そのポンプが回る手助け
は必要である、しかしそれを呼び水に使わず吞んでしまう事だけは防ぐべきだ。

「地方は地域の特徴を生かすべき」

都会の近郊都市でさえシャッターが閉まり、ゴーストタウンに近い。
交通が便利になれば成る程、それは自然の法則かも知れない。
改革とか合理化を推し進めれば、必ず起きる現象であるのは紛れもない。
工場誘致からコールセンターと、人口増加を期待して努力が成される。
それにも限界があるのも、自然の生態系と同じである。
これらはあるレベルの人には、想定できるはずではなかろうか。
都会では政治と都会の流れが、同調するかも知れないが地方ではそうでもない。

中央集権では地方で選ばれた人は、国から金を地方に運ぶ事に専念している。
地方でも何をするかでなく、とにかく事業をする事が地域の為と錯覚してきた。
極端に言えばハード面であれば、何でも持ってこいと言った時代もあった。
とても選ばれた人が成すような行為ではない。 どうして必要な未来投資とか
地域の資産価値があがる事を、しないのか不思議でたまらない。
金をかけ自然を破壊し、資産価値を無くすなど信じられない。
それを地方行政側から言えば、紐付き工事とか押し付け工事と言いつくをする。
しかし地方に、ピジョンがないからそうなったとも言える。

島ではピジョンとか行政へのアドバイスは、不必要どころか嫌われた。
住民さえも、行政に頼らず自分の事は自分でしなければと非難する。
完全にスタンスの違いである。
首長に未来像を訴えても、皆が認める事ならと公正さを示したごとく逃げる。
そこには「みんなと違うことを考えよ」とかの未来ピジョンは歓迎されない。
その結果成すこと成すこと後追い事業ばかり、それには住民は無関心である。

この辺の意識改革は、滅亡してもそれに気付かぬかもしれない。
これは悪口でなく、考えようでは温厚で謙虚な島民性とも思える。
だとすれば優れた首長の出現となるがそんな能力の有る者は都会に出てしまう。

ピジョンが無くとも遅れながらも、企業誘致などの施策には務める。
陸続きの地方でも企業誘致は簡単に出来ず難航している、海まで渡っての企業
誘致は一般常識からして理不尽である。
そのくせ島内産業には、誘致の待遇と違い冷たい物である。
これらは、完全に自己のピジョンがないから起こる現象である。
島のそうしたハンディーは、逆に取れば魅了になるのである。
しかし地域を分析し、それを生かしたピジョンは湧き上がらない。
ピジョン無き者が選ばれる体質を変えるには、島の良さ温厚さ謙虚さが無くな
る時とすればこれも大いに困ることである。

壱岐島民性は素晴らしいと思う。
温厚で謙虚さがある上に、観光にも観光業者以上に理解がある。
この事は観光地としての、一番大切な住民の親切さをかなえている事になる。
農漁業、商工業の人達の方が、これからの壱岐は観光以外ないと言い切る。
これは企業誘致しか出来ない近郊都市から見れば羨ましいような資源である。
一番真剣に答えねばならない、行政と観光業者がその意を汲んでいない。
それもこれも、温厚で謙虚さが壁になっていると思う。

最近ある雑誌で「裏作観光」と名付けて説明していた。
全国からの旅行業者を壱岐に招待したとき、誰もその言葉を知らなかった。
書いて字のごとく、裏作に観光を植えたような観光と言うことである。
別に商売に区別は要らないが、商売にも心とモラルが必要である。
裏作観光とは、あまりその辺まで深く追求しない商売と言う意味だそうだ。

年に一度か二度の旅客の大切な旅に対して、感謝の心があれば観光とは何か
と言う哲学に近づくとと思う。 周りの環境を考えた、一步進んだ観光観念を唱
えるぐらいの義務が、観光業者には有るのでは無かろうか。
地域観光を唱えればなおのこと観光業者が、企業努力で出来る事と地域として
の観光の区別は必要ではなかろうか。

観光協会はかなり幅広くやられているかも知れないが、肝心の事がなされて
いないように思う。 個人の企業努力で出来ることより、みんなでしか出来な

い地域観光の方こそがより重要おはずだ。

地域観光とは店に例えれば各自の店でなく、壱岐全体が店舗と言うことだ。

スタンスを地域に置いたとすれば、店も作らず宣伝ばかりしている事になる。地域観光は各産業との連携ですが、やはり観光協会が先陣を切るべきである。

それには私達がしっかりし、裏作観光を脱皮する努力をするべきだ。なぜ裏作観光しかできないかと言えば、顧客が足りないからである。それも私達が本気でそれに取り組みれば解決できたかも知れない。人のせいにするのではありませんが、裏作観光では設備もサービスも限界があるのは当然です、国策は離島のハンディーを無くすために離島振興法を設け、総合保養地整備法として観光業者の設備が出来るチャンスも有ったのです。ピジョンがなくスタンスが違った事での損失は計り知れません。

その当然の権利は個人の意見では受け入れられません、だから私は観光協会に入会したのです。航路問題、禁漁時期と観光との関連なども同じです。観光協会の団結は壱岐全体とつながっているのです。このような事は今まで成されていません、だから今までと違う観光協会を試みたいのです。観光が総てと言うのでなく、総ての産業が観光を起爆剤に出来ると言うのです。そんな組織の観光協会を、一度やってみても良いのではないのでしょうか。

地域観光で今成すべき事は何だろう

当初から今日は想定できた、それが読めないようでは地域観光を語れぬと思う。バブルの時期にその整備を済ましておけば、このような事態は避けられた。遅すぎるかも知れないが、知恵をしぼれば今からでもやり直せる。

しかし予算がないと逃げ切るような今日、はたして何が出来るのだろうか、おそらくこのままでは適性人口態勢となる、各町に一軒程度の宿屋と何軒かの店そして何軒かのスーパーが残りやがてはお寺さえ成り立たぬように成るかも知れない。それを食い止める義務が私達にはあるのです。

金が出ないなら、金が出るピジョンが必要である。その為には壱岐の長所である協調性を、幅広くしていただけないだろうか。温厚とか謙虚と言う言葉は、壱岐の未来を語るには別問題である。ピジョンを持ちやる気があると言う、自信のある人を起用して欲しい。そして壱岐の代表として交渉に立ち向かい、責任の所在を明らかにする。そんな人が居なとすれば、育てようではないですか。良い苗が良い畑にすくすく育つごとく、まずは先駆者が育つ畑作りが必要かも知れません。

地域観光と観光業の違い

行政は住民の生活を中心に整えるのが勤務であるが、その為にも地域の活性化が必要となる。なぜならば地方分権に向かうからである。

福祉とか教育は重視するのが当然である。

壱岐の自立を考えるなら「壱岐の活性化」が一番重要ではないだろうか。

壱岐は島である不便さが逆に魅力となる要素がある。

これは都会の観光要素の乏しい近郊都市からみれば羨ましくもある要素だ。

この事をあまり実感していない、その証拠に陸続きの近郊都市でさえ不可能と悩む、企業誘致とかに力をいれる。

それは無駄とは言わないが、観光には本気で取り組まないのはおかしい。

行政も観光協会もそれなりには努力はしている。

しかしその成果があがらないのは、スタンスの違いである。

鍋の中からはばかり見て鍋の外から見ない、近代鎖国と同じである。

壱岐観光は島の中の考えでなく、外から見た考えが必要だ。

それと同時に自分が行く観光でなく、迎える観光を考えねばならない。

現在はその状態さえ理解されぬまま、議論されている。

その上行政も観光業者も「観光業」の立場で論じるからスタンスが狭い。

その為か行政も観光業者も他産業に遠慮がある。

それに比べ壱岐の他産業の方の観光理解度は最高だと思う。

無意識に地域そのものが観光との理解がある、「観光業」でなく地域観光が観光であると解っている、だから観光を支持するのである。

観光業者だけの観光ならこのような理解度はなかろう。

これからの地方はピジョンが持てるか持てないかで左右される。

ピジョンがあればやる気が起こり、希望が湧いてくるのである。

希望の無いところに幸せが訪れるはずがありません。

故に首長の役割は痛みと希望を備えた改革の信念が一番重要である。

総論

地球の存続さえ危ぶまれる今日では、正論など通用しない時代とも思われる。何でもありの信じがたい時代、強い者だけが生き残るとしか思えぬ風潮である。しかしそれを超えるには、人間の知力を信じるほか仕方が無い。

これからは正に人間の知恵を試される時代だと思う。
人類総てがお天道様に真っ直ぐの心になれないものだろうか。
腹いっぱいになれば満足して欲しい、人間の欲で腹二杯までは仕方が無い。
それ以上何杯も食べれば、人間が壊れるだろうに。
それが出来ないのが民主主義の弱点だが、人間ならそれを補えるはずだ。

それが上から正すか下から正すかで、鶏と卵論ではどうにもならない。
上では上で、下では下だと努力すればそれは解決できるはずだ。
それもこれも人間の知力に期待するほかはなかろう。

現在の地方も国にもそれを正す人とそうでない人が存在する。
その中でも国は地方より人材が豊富なはずだ。
国と地方の立場で言えば、地方分権と言っても親と子供の関係がある。
そのお互いの真意を貫けば総ては上手くいくはずだ。
遊びほうける金はやればやるほど子供は墮落する、自立しようと努力する子供を支えれば、親孝行する立派な子供が育っていく。

現実一部の国のトップはその方針を示している。
しかし全部がそうでもないかもしれない、地方にも同じことが言える。
地方が国に申し出るには、地方でそれをまとめてからでしか言えない。
でも地方では意識改革が無い限り自立には無縁な事しか決まらない。
それでは以前の依存型の脱皮には程遠い結果が続く。
地方にもそれを脱皮しようとする自立案は少数なら存在する。
そこで地方からのその自立案をどう対処するかが一番重要ではなかろうか。

行政に頼るなどスタンスの違う世界を超え、行政と協働こそがこれからの真の日本に必要なシステムであると、離島から願うのみである。